

———鎮守府に勤めてるんだが、もう私は限界かもしれない

れいのやつ Lv40

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラック鎮守府。それは艦娘を人と見なさず、兵器としてすら重用されず、毎日のように艦娘たちが沈んでいく悪夢の鎮守府。
彼女たちはブラック鎮守府の過酷な日々によつて心に傷を負い、絶望に沈んで……いなかつた。

彼女たちは通常の艦娘とは凄まじく感性が異なつていたのだ。
ホワイトなんて生温い、ブラックぐらいが性に合う。酷使？ 特攻
？ それが何。

※pixiv様にも投稿はじめました。

目 次

| | | | | | | | | | |
|-----------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| ———鎮守府に勤めてるんだが、もう私は限界かもしけない | 1 | | | | | | | | |
| 一航戦赤城は機械である | | | | | | | | | |
| ホワイトの『普通』は難しい | | | | | | | | | |
| 貴族艦五十鈴は正常でありたい | | | | | | | | | |
| 狂乱川内姉妹日記 | | | | | | | | | |
| ダメ鎮守府製造機 | | | | | | | | | |
| 24時間戦えますか | | | | | | | | | |
| 渡る世間はクズばかり | | | | | | | | | |
| オリヨクルは衰退しました | | | | | | | | | |
| ホワイトに英雄譚を求めるのは間違つて いるだろうか | | | | | | | | | |
| 満潮は期待しない | | | | | | | | | |
| 47 | 44 | 39 | 34 | 30 | 24 | 20 | 15 | 11 | 6 |

——鎮守府に勤めてるんだが、もう私は限界かもしれない

「またか……」

とある鎮守府、一人の男が溜息を吐いた。この鎮守府を預かる提督である。彼の手元には何枚かの書類があつた。今見ているのは鎮守府にいる各艦娘からの要望などをまとめた物であつた。

「提督、もしかしてまた彼女からですか？」

「ああ、『出撃嘆願書』だ」

不安げな様子で提督に話しかけたのは秘書艦を務める艦娘、大淀である。彼らの会話からも分かるように、ある艦娘からの『出撃嘆願書』はここ最近毎日のように提出されていた。

「もう出撃しなくても大丈夫なのに……足柄さん、まだ前の所の感覚が抜けないんでしょうか」

「仕方ない。彼女にとつては休息日がある方が異常だつたんだ」

そう、件の出撃嘆願書は足柄からの物であつた。そして「前の所」という台詞通り、足柄は元々この鎮守府の艦娘ではなく、別の鎮守府から異動してきた艦であつた。

それもただの鎮守府ではなく、艦娘に残酷な仕打ちをする提督が運営する鎮守府——所謂ブラック鎮守府の艦娘だつたのである。

ブラック鎮守府。艦娘にとつての地獄にも等しい悪しき鎮守府。その内容は多岐に渡る。足柄がいたのは所謂酷使系であつた。

「休息どころか、睡眠時間すらほとんど無かつたそうですからね。実際、この鎮守府に来てからも足柄さんはほとんど眠つてないです」

「馬鹿な話だよ。艦娘にも疲労は溜まるつていうのに」

艦娘は兵器だが、同時に少女もある。人間のように疲労も蓄積していく。疲労が溜まれば本来の性能を発揮するのは難しくなる。艦娘にも休息を与えるのが常識。しかし、そんな常識はブラック鎮守府には通用しない。

「例の鎮守府の艦娘は戦果を上げるための道具としか思われていな

かつたようですから。一日のほとんどを出撃と遠征に費やし、任務が終われば休みもなくまた出撃か遠征。そんな日々が続いてまともに性能が発揮できるわけもありません」

「建造されたばかりの艦娘は数日で沈むことも多かつたらしいな。記録を見ると面子の入れ替わりが激しすぎる。まるで末期戦だ。足柄はよく沈まなかつたな」

「足柄さんはあの鎮守府に早期に着任した古参のようですから。酷使にも慣れて問題なくなつたのかもしれませんね」

他の艦娘が無茶な運用に耐えられず次々沈んでいく中、初期から主力として活躍していたのが足柄であつた。

「足柄さんが初期に着任しなければ早々にあの鎮守府は陥落していただしようね。本来なら幸運だつたと喜ぶべきなのですが……」

「艦娘たちにとつては不幸でしかないな。足柄の活躍でブラック鎮守府が長く存続してしまつたのは」

提督と大淀は軍人として前線基地たる鎮守府があつけなく陥落しなかつたことを喜ぶべきか、人として艦娘たちが数多く沈んだのを悲しむべきかわからなかつた。ただ、ほぼ一人で鎮守府を存続させた足柄は称えられるべき存在なのは間違いない。

「ともかく、この嘆願書は受理できない。心情的にもそうだが、ブラック鎮守府から保護した艦娘への対応としても、3ヶ月は出撃は無理だ」

「メンタルケアのために作られた規則でしたつけ。この前足柄さんにも説明したんですが「メンタルなら問題ないから出撃させて」としか……」

「というか、大淀の記憶では顔を合わせる度に「出撃させろ」と言われているような気がする。そしてそれ以外の話をされた覚えがない。

「本人がそう言つても駄目だ。規則では一応提督の判断で様子見の出撃は許されているけど、そもそも心へのダメージは当人にはわかりにくいものだからな」

「そうですね。足柄さんも気付かない心の傷があるかもしれません」

「……といえば、足柄は指輪をしていたな」

提督は思い出していた。ブラック鎮守府が陥落し、生き残りとして引き取られてきた足柄の薬指には確かに指輪が光っていたのを。

「はい。足柄さんはケツコンカツコカリをしていましたようです」

「そのせいかもしないな。足柄が出撃したがるのは」

「……はい？」

大淀は首をかしげた。ケツコンカツコカリと、足柄の出撃嘆願と何の関係があるのだろうか。

「ケツコンは提督との絆だ。俺たちから見ればブラック提督でも、足柄にとつてはそうじやなかつたのかもしない」

「信頼する提督を失つた行き場のない感情をぶつける為に出撃したがつて いる？」

「推測だけどね」

ケツコンカツコカリに至るほど信頼していた提督を失つて、自棄になつて いるのかもしない。もう戦うことでしか感情を抑えられないのかかもしれない。

「ただ、仮に足柄にとつて良い提督だつたとしても、戦うこと以外を教えなかつたのはやはり俺は許せない。艦娘は人と同じ感情があるんだ。人と同じ楽しみを知るべきだ」

「提督……」

確かに艦娘は兵器だ。だが、彼女たちには人と同じ身体がある。人と同じ感情がある。なのに、兵器としての生き方しか知らないなんて悲しいではないか。

彼女たちはただの兵器ではない。人と同じく、笑い、泣き、怒り、楽しみ、そうやって生きていくべきなのだ。いや、生きていくべきなのだ。

「提督、足柄さんを絶対に幸せにしてあげましようね」

「ああ、もちろんだ」

人の幸せを教えてあげよう。兵器としての生き方しか知らない彼女に。

◆ ◆ ◆

そう提督と大淀が決意した頃、件の足柄は飢えていた。狼の如く飢

えていた。

「うう……出撃い……出撃がしたいい……」

与えられた自室で机に突つ伏し、唸つていた。……提督と大淀は足柄がブラック鎮守府の艦娘だということに気を取られすぎて、ある事実を失念していた。

「なんでよお……なんで出撃が認められないのよお……メンタルケアつてんならむしろ出撃こそ必要でしょお……私||出撃は常識でしょお……」

——そう。足柄は元々、戦場と勝利を何より求める艦娘。彼女が出撃を嘆願するのは、別にブラック鎮守府の影響でもなんでもなかつた。

「せっかく前提督にもつと強くなれるようにしてもらつたのに……私は自分が強くなつたと実感できるあの時が、今自分がここに在るとわかるあの瞬間が一番好きなのに！」

そしてこの足柄は、数ある足柄の中でも筋金入りであつた。そもそも彼女がケツコンしたのも、「自分の強さが頭打ちになつたのが不満だつた」という、全く色氣の無い理由だ。その経緯も主戦力である彼女の強さが頭打ちはなつた事に気付き、若干不安になつたブラック提督が、ケツコンすればレベル上限が上がるのを知り、戦力増強のためケツコンを持ち掛けて、彼女が「更に強くなれるなら!」と了承しただけである。提督が考えるようなロマンスは一切なかつた。

「ああ……戦場が恋しい……前の環境ですら私には不足だつたのに……」

そう、彼女は足柄の中でも、戦場のスリルを味わい、生と死の狭間に身を置く事を好む、生糰の戦鬪狂^{バーサーカー}。同僚の艦娘たちが酷使され疲弊し沈んでいく中、彼女だけは嬉々として出撃するばかりか、むしろ出撃回数が少ないと零していた狂人である。

「……前の提督の時みたいに勝手に出撃してやろうかしら……でも前ほど好き勝手できる環境じゃないし……」

手段のためには目的を選ばないろくでなしである彼女は、出撃予定でない時まで勝手に出撃し、撃沈者不明の戦果を多発させブラック提

督を困らせていた。更にブラック提督は大破でないと入渠を許さなかつたため、仲間の艦娘たちが大破寸前の中破で戦闘が終わりそうになつた場合、その艦娘に誤射のふりをして沈まない程度の攻撃を仕掛け、強引に大破にして入渠できるようにしつつ「私の出撃機会も増えるし一石二鳥ね」などとのたまつていたようなどうしようもない艦娘である。

「ああ……あの天国から見放された外側の世界へ行きたい……血と硝煙の臭いに塗れ、狂氣と悪夢に支配されたあの地獄をまた……」足柄が唯一生の充足を得られる場所は戦場だけだ。常に戦場に身を置いていなければ、彼女は生を実感できない。

「あああ、『まともでいる』ということがこんなに苦痛だなんて……！正氣で日常を過ごすなんて贅沢は私にはいらない！　ただ、戦場と勝利さえあれば私は現在いまを実感できるのに……！」

——ホワイト鎮守府に勤めてるんだが、もう私は限界かもしれない。

一航戦赤城は機械である

「赤城さん」

一航船の正規空母、加賀が同じ正規空母仲間の艦娘、赤城に声をかけた。しかし、親しい相手に声をかけたにしては、加賀の表情は異様に固い。それもそのはず、加賀が声をかけた相手である赤城は元々はこの鎮守府の艦娘ではなく、ブラック鎮守府の艦娘だったからだ。

ブラック鎮守府出身の艦娘は、その境遇から人間不信どころか、場合によつては同じ艦娘にすら怯えてしまうほど心に傷を負つた者もいる。声をかけるだけでも勇気がいる存在だ。

——最も、この赤城はそれらの艦娘とは別ベクトルで厄介だったが。

「あ、加賀さん。任務ですか？」

これだ。加賀は思わず溜息をつきたくなるのをこらえた。この赤城は、よく見られるブラック鎮守府の艦娘のように人間や艦娘に怯える様子は全くなき。その点では安心できいたが、その代わりと言ふべきなのかな、彼女はあまりにも人間味がなかつた。

まず、感情が乏しい。感情の起伏が表情に出ないと言われる加賀よりも更に酷い。他人と話す時に笑顔にはなつてくれるが、心からものではなく貼付けたような作り物の笑顔しか見たことがない。彼女と並んでいると加賀が感情豊かに見えるほどだ。そして誰とも話していなき時は、何をするでもなく無表情で虚空を見つめている。まるで心そのものが無いように見えて恐怖を覚えるほどだ。

何より赤城は自己表現というものがなく、口を開けば彼女から出て来る言葉は「任務かどうか」だ。それ以外には全く興味がないといふか、まるで自身を任務遂行のための機械か何かとも思つてゐるかのようだ。ブラック鎮守府はここまで艦娘を壊してしまうのかと加賀は戦慄した。

——加賀のその認識はある意味で正しくない。赤城が無表情で空中を見つめたり、笑顔が貼付けたようになるのは、単にこの赤城にそういう癖があるというだけであつた。そして、赤城が口を開けば任務

のことしか言わないのでデフォルトである。赤城とは得てしてそういう傾向のある艦娘であり、別にブラックの影響でもなんでもなかった。

最も、この赤城が他の個体より人間味が無いのは加賀の勘違いではなかつた。ブラック鎮守府では他の艦娘との触れ合いの機会に乏しい。赤城は他者と触れ合はずとも問題なく過ごしてしまつた為に、彼女の「自身は兵器である」という初期認識を変えることができなかつたのだ。

「……赤城さん、任務はありません」

「そうですか。任務はまだでしょうか」

「……ブラック鎮守府から異動してきた艦娘には最低半年間は任務はありませんよ。説明もされたはずですが」

「すみません。よくわかりません」

生き物ではなく機械と話しているかのような会話の手応えに加賀は今度こそ溜息を吐いた。一方、赤城は疑問であつた。なぜ戦力になる自分を出撃させないのであるかと、この鎮守府に来てからずっと不思議に思つていた。だが、彼女はその理由を他者に問うようなことはしない。機械は質問などしないのだから。

「……それより赤城さん、食事は済ませましたか？」

「食事？ 私は出撃していません。『補給』は不要です」

これも赤城には疑問のひとつだつた。この鎮守府に異動して来てからやけに『補給』を奨められるのだ。前の鎮守府では必要な時しか行わなかつたのだが。一方、加賀は赤城のその返答に頭を抱える。

「……赤城さん。食事は補給とは違います。補給と別に美味しいものを食べてもいいのです」

「美味しいというのはよくわかりません。補給に感慨など抱くものでしようか？」

赤城にはそもそも補給以外の食事というものが想像できなかつた。彼女にとつては食事とは戦場において消耗した燃料を補給する為の行為でしかなく、そこに趣味嗜好が入る余地はない。元より認識がズレていたのである。

しかしこれに關して言えば、特別赤城がおかしいというわけではない。本来、艦娘の食事は補給のために行うものだからだ。艦娘が嗜好として食事を行つていることの方がある意味では不自然でもあつた。

「……これ、どうすればいいのよ」

一方、加賀としてはもはやお手上げである。赤城といえば、暇な時よくご飯のことを話題に出す、食事が何より大好きな艦娘というのが定説だ。なのに、その食事にすら興味を示してくれないときたら、一体どうやつて親睦を深めればいいのか。

「二人とも何してんだ？」

「加賀さんが悩んでるなんて珍しいわね～」

「……天龍さん、龍田さん」

そんな加賀の側に天龍と龍田の姉妹が歩み寄つてきた。どうやらたまたま通り掛かつたらしい。

「いえ、お気になさらず」

「ま、いいけどよ。そういうや、加賀と赤城はどうちが弓上手いんだ？」

「は？ 何です歎から棒に」

確かに加賀と赤城は共に弓を使うが、あまりに唐突な天龍の質問に加賀は疑問符を浮かべる。龍田が苦笑しながら説明した。

「天龍ちゃんね、この間ウイリアム・テルのお話を読んだのよ～」

「ああ……なるほど」

その龍田の説明で加賀も納得した。ウイリアム・テルと言えば弓の名手だ。単純な天龍のことだ、また小説に影響されたのだろう。

「そうそう。加賀と赤城はああいうのできねーのか？」

「それは、できると思いますが……」

天龍の言うのは彼の有名なリンゴを撃ち抜くあれの事だろうが、よく勘違いされているがあれば確かクロスボウでやつたんではなかつただろうか。

「暇なうよ、実際にやつてみようぜ！」

「は？ なんで私が……」

あまりに唐突な話に加賀は断ろうとしたが、ふと考えた。こういうことは今までしたことが無いが、これはある意味、赤城と親しくなれ

るきつかけを作るチャンスではないか？

「……いいですよ。やりましょうか」

「おっ、そうか！」

「じゃあリンゴを乗せる役は天龍ちゃんね～～」

「えつ、オレ!?」

「言い出しつぺなんだからそれぐらいやりなさいな～～」

龍田に勝手に天龍が的役をやらされるのを横目に加賀は赤城に声をかけた。

「ということらしいので、赤城さんもお付き合いいただけますか？」

「任務ですか？」

「いえ、任務ではないのだけど……」

相変わらず機械的な態度の赤城の説得には多少手間取ったが、なんとか言いくるめて演習場まで移動する。

「準備はいいですか～！」

「ええ

演習場に行く間にいつの間にかついて来た第六駆逐隊の暁が何故か仕切っていた。

それはさておき、天龍の頭上に置かれた的となるリンゴ目掛けて加賀が弓を引き絞り矢を放ち——矢は吸い込まれるようにリンゴの中心を射抜いた。

「おお……！」

「さすが加賀さんなのです！」

「やつぱりレディは違うわね」

「フ、フフフ、ビビってなんかないぜ」

「天龍ちゃん、誰も聞いてないわよ～～」

ギヤラリーが好き勝手に騒ぎ立て天龍がやせ我慢をする中、今度は赤城の手番である。機械的に素早く弓に矢を番えると一切の逡巡も見せずに流れるように矢を放ち、矢は当然の如く天龍の頭上のリンゴを射抜き——

——大爆発した。

「て、天龍ちゃん～～～ん!?」

「はわわ、天龍さんが大破したのです!?」

「メ、メデイツク！ メディーツク！」

「あ、赤城さん、やり過ぎです!!」

「すみません。よくわかりません」

——戦闘マシーン赤城。自身を機械と定義している彼女は『手を抜く』という行為が致命的に下手なのだった。

ホワイトの『普通』は難しい

「…………」

——ある鎮守府の食堂で一人、黙々と食事を行つている艦娘がいた。『幸運艦』と呼ばれた五航戦、瑞鶴である。彼女は周囲からの奇異な視線を一切気に留める事なく食事を続ける。

「…………」

まるで作業の如く淡々と食事を行う瑞鶴。否、彼女にとつてその行為は正しく作業であつた。

——彼女がかつて属していたブラック鎮守府において、食事とは『補給』のための過程でしかなかつたのだから。ゆえに料理の味を楽しむなど、そういう感覚は彼女は持ち合わせていない。

「瑞鶴。また1人で食べているの？」

「…………翔鶴姉」

そんな瑞鶴に対し心配げに声をかけて来たのは、彼女の姉である翔鶴だ。その声には心から妹を気遣う想いが籠められている。しかし、瑞鶴はこの姉が正直なところ苦手であつた。

「あなたは酷い所にいたんだから……」
「ういう食事はもつと楽しんで食べないと。それが普通なのよ」

——これだ。似たような言葉はここに来て何度もかけられたが、彼女は特に瑞鶴に『普通』を教え込むのに熱心であつた。姉妹なのだからそれが『普通』なのだと理解はしているが、しかしそんな姉の気遣いは当の瑞鶴にとつては煩わしい事この上ない。

たかが兵器が『異常』だの『普通』だの、何をそんなにこだわつているのか。そんなどうでもいい事よりも、より多くの深海棲艦を沈める事に心血を注ぐべきだというのに。

「私はね、瑞鶴。あなたに普通の幸せを知つて欲しい。あなたのいた鎮守府みたいな地獄にはもう戻らなくていいの」

地獄。地獄と来たか。確かに『普通』の鎮守府から比べればなるほど、確かにあの鎮守府は地獄なのだろう。だが、瑞鶴にはそうは思えない。

——かつての記憶が囁くからだ。地獄とはあんな生温いものではないと。

——あの忌々しいマリアナ沖で、航空機の航続距離違いに頼ったアウトレング戦法。強大なアメリカ艦隊との正面決戦に勝ち目が無かつた故の苦肉の策。あの戦略と言うのもおこがましいような無謀の極みを本気で実行し、敵軍に七面鳥撃ちと嘲笑われた、あの狂気の支配した戦場。

あのかつての日々と比べれば、瑞鶴には前任の下した無茶な命令など笑つて領ける程度のものでしかない。何をそんなに悲観することがあるのか、全くわからない。

「……いつ沈むかもしれないのに、幸せに浸つてもしようがないでしょ」

「いつ沈むかわからないからこそ幸せを知つて欲しいのよ」

余計なお世話だ。戦場において幸福などノイズでしかないのに。大体、兵器が人間の幸福を知つてどうしようというのだ。兵器である艦娘にとつての幸福だというなら、ホワイトだらうがブラックだらうが戦に貢献して深海棲艦を沈める事こそが自分たちにとつての幸福ではないのか？ それともこれは『普通』の考えではないのだろうか。わからない。

「それに普通の鎮守府なら私たちは早々沈んだりしないわ。もう地獄にはいなくていいの。それに瑞鶴、命は大切にする物よ。自分の物も、他人の物もね」

姉のその言葉に瑞鶴は酷い頭痛を覚えた。『命を大切に』？

——軟弱だ。軟弱過ぎる。戦争で犠牲が出るのは当たり前ではないか。ましてや自分たちは兵器だ。消耗品だ。なのに、なぜ沈むのをそれほど忌避する？ 死を恐れる？

それに、艦娘である自分たちに命があるというなら、我々が散々沈めてきた深海棲艦はどうなのだ。奴らには命が無いとでも？

大体、戦争の為に生み出された殺戮機械の分際で何をさも尊いかのように命を語つていいのだ。どう取り繕つても結局は敵を殺す為の兵器でしかなくせに、滑稽極まりない。

それに、ブラック鎮守府が地獄だというなら、前世はなんなのだ。命を数で認識し、未来ある人々を消耗品と扱い、皆があの世への片道切符を持たされたかつての戦場と比べれば、あの程度、なんでもないではないか。

瑞鶴にはわからない。理解できない。ブラック鎮守府？　ああ、確かに前任は良い司令官ではなかつただろう。艦娘の扱いも下の下だつたろう。だが、だからなんだというのだ。戦争で無能な上官の下に配属される兵士などいくらでもいる。珍しいことでもなんでもない。

ましてや自分たちは戦艦いくさぶねだ。兵器だ。兵器は使い手を選べない。なら、従えばいい。他にどんな選択肢がある？　無茶な運用で沈むのが嫌だというなら、自らの武力でどうにかすれば良いではないか。以前と違つて、自分たちには考える頭も、自由に動く身体もある。使い手に不平を言つている暇があるのなら、その性能を使つて、敵を屠り、戦場を生き延びればよいではないか。事実、瑞鶴はそうしてきました。（きっと、これも『普通』の考え方じゃないんだろーな）

頭ではわかっている。おそらく、この姉や周りの艦娘たちの方が『普通』なのだ。きっと異端なのは自分の方なのだろう。

——あのレイテ沖にて、誰もが失意と諦観に蝕まれた地獄の中で、盲目的に勝利を目指していただ一人の提督のように。

（ああ、まるでぬるま湯みたいな日常。ここにいたら鏽びる気がする。平和は魂を腐らせる。戦場に行きたい。あの戦争の狂気を思い出さないと……）

そうして瑞鶴は食事を切り上げ席を立つ。そしてそのまま出口へと向かつた。

「ちよつと瑞鶴……」

まだ何やら話し掛けてくる姉を、瑞鶴は無視して横切つた……否、横切ろうとした。

「うーん、やつぱり七面鳥うますぎ！」

「なんですか？」

——その瞬間、瑞鶴は修羅と化した。まるで怨敵を前にしたかのよ

うに瞳に冷酷な眼光を携え、その身体からは異様なオーラが立ち上る。

「ちよ、ず、瑞鶴!? あ、秋雲さんっ!! 逃げて!!」

「へ? なに翔鶴さん、どうしたの?」

瑞鶴の異変に気付いた翔鶴が七面鳥に舌鼓を打つて、艦娘——秋雲を逃がそうとするが、遅い。

「全機爆装! 準備でき次第発艦! 目標、母港食堂の七面鳥!
やつちやつて!!」

その号令と共に瑞鶴から艦載機が飛び立ち——爆撃した。

「ぎにゃああああん!?」

「あ、秋雲さああああん!?」

「はつ!? 私は何を……」

——正気に戻った瑞鶴の目には、理不尽な爆撃を受け吹き飛ぶ秋雲と、そんな秋雲に向けて絶叫する姉の姿があるのでした。

——この後、鎮守府の食堂のメニューから七面鳥が姿を消したという。

貴族艦五十鈴は正常でありたい

「五十鈴さん」

「あの……」

唐突に話しかけてきた二人の艦娘に、話しかけられた側の人物——『貴族艦』五十鈴は煩わしげに目線を向けた。それに対し艦娘たちは、無意識なのか怯んだように後退る。

(……そんなに怖いなら放つておけばいいでしょ)

——ブラック鎮守府出身の五十鈴にとつて、他の艦娘との付き合いなど希薄なままで問題ない。怯えるほど恐ろしいならば無視していればいいだろうに、なぜわざわざ話しかけてくるのだろうか。

「あ、あの、五十鈴さん！」

「私たちと一緒に風呂に入りませんか！」

勇気を持つて言葉を発した様子の艦娘たちだが、その内容は五十鈴には困惑しかもたらさない。

「お風呂お？ 血や硝煙で汚れているわけでもないのに、『洗浄』は不要でしよう？」

五十鈴からすれば、艦娘の入浴というのは『兵器』が戦闘で汚れたのを洗浄するための行為だ。ここに来てから五十鈴は全く出撃していないのに、わざわざ入浴する必要性が見当たらない。

「そんなこと言わないで下さい！ オ風呂は身体を休めるのにとっても効果的なんですから！」

余計なお世話だ。別に自分は休息など必要としていない。あの鎮守府では休息などできなかつたが、特に任務に支障が出たことはなかつたのだから。そもそも、『兵器』である自分に休日など不要だ。日ノ本の曜日は月月火水木金金。その精神でいれば、休日の無い日々など何とも思わなくなる。そう、前世の彼らのように、「嫌な思い出を洗い流す意味も込めて……」

(嫌な思い出、ねえ?)

そう言われても、五十鈴には嫌な思い出などないのだが。なぜこのような扱いを受けるのかを、五十鈴は薄々察している。どうもここ

艦娘たちは五十鈴のこの性格がブラック鎮守府での影響だと思つて
いるらしい。勘違いもいいところだ。五十鈴の性格は生来のもので
ある。あの鎮守府にいたせいで変わった所など……。

「ああ、無くは無かつたわね」

五十鈴は三日間顔を合わせなかつた相手の名前を覚えられない。
二日目に自ら忘れてしまうからだ。

あの鎮守府では朝に顔を合わせた新しい仲間が夜には海の藻屑と
なつてゐるなど珍しくもない。それが駆逐艦だろうが空母だろうが
例外はない。むしろ初陣を乗り越えられる艦娘の方が希少なぐらい
だ。ゆえに、共に戦場に出る艦隊の顔ぶれも一日毎に目まぐるしく入
れ替わる。

そんな日々が続くと、段々と親睦を深めるのが面倒になつてくる。
ゆえに、五十鈴は三日連続で顔を合わせるようになつた相手の名前し
か記憶しようとしている。今や五十鈴が姉妹艦以外で名前を覚えてい
る艦娘といつたら、自分と共にあの鎮守府を生き残つた数人ぐらい
だ。

この鎮守府に着任した際も艦娘全員に自己紹介されたが、彼女らの
名前も正直覚えていない。そもそも今話しかけてきている相手が誰
かすらわかっていないなかつた。まだ物言わぬ戦艦いくさぶねだつたころの知り合
いかもしれないが、だからと言つて艦娘となつた今現在の姿を知つて
いるわけではない。

いや、もしかしたら知つていたのに忘れてしまつたのかもしれない
が、それも五十鈴にはどうでもいいことだつた。別に仲間の名前を忘
れていようが、その性能を把握していれば問題ないのだから。

「そうですよね！ 意見した艦娘を解体しちゃうような提督のところ
にいたんです。五十鈴さんにも色々と忘れないことがあると思いま
すから」

どうやら五十鈴の独り言は返答と捉えられたらしい。しかし——
またその話かと、五十鈴は嘆息した。いやに同情的な雰囲気でこの話
題を出して慰められるのは既に一度や二度ではない。五十鈴は別に
何とも思つていないので。

五十鈴個人としては別に前の提督に対してもう思っているところはない。まあ、確かに無茶な艦娘の運用には日々四苦八苦させられていたが、だからと言つて不満など抱いていない。自分たち『道具』をどう使うかなど、人間の勝手なのだから。

(兵器の分際で提督に意見したから解体されただけでしょ。それのが問題なのだ)

五十鈴は本気でそう思つている。艦娘はただの兵器だ。勝ちを手にするためにいくらでも犠牲にできる消耗品。それならば自分の思い通りに動く物の方が良いに決まつていて。

こここの艦娘はやたらと悲劇のようにこの話を語るが、五十鈴からすれば、道具のくせに使い手に文句をつける『不良品』が廃棄処分という当然の末路を辿つただけのことだ。何をそんなに嘆くことがある？ むしろそちらの方が嘆かわしい。

(意見したぐらいで解体なんて、艦娘の命をなんだと思つていて、とかかしら？)

——その思考に五十鈴は凄まじい忌避感を覚えた。

(——馬鹿馬鹿しい。私たちはそもそも生きていないのでしょ。)

今はこうして人のように過ごしているが、自分たちは本来は息もないし鼓動も無い。自ら動いたりしない。

当然だ、自分たちは『物』なのだから。命なんてそもそも始めから

存在しない。こうして会話していること自体が奇妙なのだ。

(やはり人間の身体を得たから、人間の価値観で動くのかしらね？)

そうだとしたら滑稽極まりない。人の身体を得ようが得まいが、今さら自分たちが兵器である事実は変えようがない。なのに、人の身体を得て、自由に動き回れるようになつたからといって自分が兵器である事を忘れている連中が多くすぎる。

戦争で兵器が壊れるのは当然だし、使い捨てにされるのも日常のはず。兵器のくせにその扱いが不満だとうなら、そちらの方が異常ではないのか？ 人間ですら時には使い捨てにされるのが戦争だとうのに。

『牧場』なんて、二度と思い出さなくて良い事だと思います」

そう思考を巡らせて いる内に、何やら話題が移つて いたようだ。しかし、『牧場』か。

「……まあ、確かにあれは気分の良いものではなかつたわね」

『牧場』とは、一部のブラック鎮守府で行われて いる行為を指す。一部の艦娘のみを一定まで育ててから改造を施し、改造で追加された装備を剥いだ後に近代化改修の素材にするという行為。

その様がまるで家畜の養殖のよう に映ることから『牧場』と呼ばれる。艦娘を人と思わない外道行為であり、何より『牧場』が行われて いる鎮守府の艦娘の士氣にも影響が出るということで基本的に非推奨行為だ。

その中でも、五十鈴という艦娘は改造可能になるのが圧倒的に早く有用な装備が追加され、さらに改修素材として優秀な装備を得られる事から最も『牧場』の被害者になりやすい艦娘とされていた。

——彼女はブラック鎮守府の五十鈴の中で偶然最初に着任したため、そのまま戦闘用に運用され、結局最後まで生き残ったのだが。

「当然です！ 艦娘、それも自分と同じ子たちが家畜のように扱われるなんて気分がいいはずありません！」

（不快だつたのはそれではないのだけどね）

五十鈴が不快だつたのは提督の『牧場』行為に対してではない。というより『牧場』を知つた際はむしろ感心したぐらいだ。自分という兵器にはそういう活用法もあつたのかと。

——五十鈴が不快だつたのは、装備を剥がされ、近代化改修の素材にされる五十鈴たちの見せた反応だ。『やめて』『嫌だ』『助けて』『消えたくない』……。

——あの弱々しい声を思い出し、五十鈴は忌々しげに舌打ちした。牧場だろうが素材だろうが、それが人間の決めた活用法であり、何より戦に貢献できるのならば何も問題ないではないか。所詮この身体は消耗品なのだから、未来への礎になれるのならば喜んで身を捧げるべきであろう。

なのに、なぜ五十鈴たちがああも拒否反応を示すのか、彼女には本気でわからなかつた。あれが自身と同じ『五十鈴』なのだと思うと虫

酸が走る。

「五十鈴さん、人間は酷い人ばかりじゃありません」

「そうです。ちゃんと私たちを愛してくれる人もたくさんいます」

愛。愛か。なるほど、道具として、人間に大切にされるというのは確かに心地よくはある。しかし、道具を大切にするあまり死蔵して、その性能を発揮させないのは本末転倒ではないのか？

（いつそ勝手に出撃してやろうかしら）

そんな考えまで浮かんでくるが、持ち主の意思もなく勝手に動く兵器などそれこそ前代未聞だ。兵器として有り得まい。まあ、足柄や川内なんかは日常的にやっていたが。

そうでなくとも、前任の元にいた頃は「敵を殺して来い」というだけの、作戦ですらない、しかし兵器としては至極わかりやすい方針を示されていた。そして数え切れないほどの深海棲艦を沈めたものだ。（あの頃は良かつたわね。ただ敵を屠っているだけで一日が終わつていたわ）

——五十鈴は『ブラック鎮守府』とやらだつたらしい前の鎮守府での日々を懐かしみ——深く溜息をついた。その『昔を懐かしむ』という行為を行つていることこそが、自身が純粹な兵器でないということを証明する恐ろしい病であるような気がして。

狂乱川内姉妹日記

——ブラック鎮守府。並の艦娘では到底耐えられぬであろうその場所での過酷な日々を、幸運にも姉妹揃つて生き延びた艦娘たちがいた。川内姉妹である。しかしそんな彼女らは今、与えられた部屋で荒れていた。主に長女である川内が荒れていた。

「ううう！ なんで出撃許可が出ないのよお～！ 夜戦が私を呼んでるのにい～！」

川内。彼女は艦娘一の夜戦バカである。特にブラック鎮守府出身のこの川内は、夜になればブラック提督が何も言わなくとも勝手に出撃して夜戦に参加していた相当な問題児であり、しかしその夜戦での奮迅ぶりと夜戦だけさせていれば満足するという扱いやすさから重宝されていたという夜戦版足柄と言うべき存在であった。もはや夜戦バカを通り越して夜戦狂と言つてもいい。

「ね、姉さん……仕方ないですよ、規則なんですから」

そんな川内を宥めるのは姉妹の次女である神通だ。眞面目な彼女は規則は厳守すべきだと考えているが、しかしそんな言い分ではこの姉は納得しない。

「何が規則よ！ 私個人の感情を抜きにしても、私たちを遊ばせておく意味なんてないでしょ！」

「それはまあ……確かに……」

ブラック鎮守府での日々を生き残つた彼女らは、当然の如く練度がカンストしている。川内の言う通り、そんな艦娘を三隻も遊ばせておくというのは戦力的には愚策以外の何物でもない。

「出撃とはいひながら、巡回に出るぐらい認めてほしいわ！」

「姉さんは巡回中にそのまま夜戦に行きそうですし……」

「きいーっ！」

実際そうするつもりだつたらしく苛立ち吠える川内。とはいえ、実際のところ自分たちを出撃させないのは極めて非効率的だと神通も思っていた。せめて訓練ぐらいは行いたい。何より、ブラック鎮守府での日々を生き延びた自分なら、他の皆に教えられる事も多いはず

だ。

(訓練をして、今度こそあの娘たちを……)

神通はブラック鎮守府を生き延びた艦娘の中でも珍しく他の艦娘を気にかけている人物であった。ブラック提督の命令に反発することはしなかつたが、過酷な戦場の中で生き延びる艦娘が少しでも増えてほしいと、他の艦娘を引き連れて訓練を自主的に行っていた。その訓練の結果が出た事はほとんどなかつたが。

そんな彼女からすれば、姉の夜戦狂いはともかく、こうして命令も無く部屋に待機している現状を良く思っていないのは事実であった。自分たちが出撃すれば、未来にどこかの艦娘を沈めるかもしけない深海棲艦を何隻撃破できることか。こうして無為に過ごしている間にも、どこで仲間が沈んでいるかわからないのに。

「そうだねー。那珂ちゃんも早く現場に出たいよお」

「な、那珂ちゃん……？」

そうして会話に加わってきたのは自称艦隊のアイドルこと川内姉妹の末妹、那珂である。しかし、実のところ神通はこの妹が苦手であつた。なぜなら彼女は姉とは別ベクトルでぶつ飛んでいるのだ。

「那珂もやつぱり出撃したい？」

「うん。口ケにいきたいなあー。もちろん那珂ちゃんが旗艦センターでね！」

那珂はとにかく旗艦になることにこだわる。これはブラック鎮守府出のこの那珂に限らず、一般的に見られる傾向である。一方の川内や神通は特に旗艦になりたいわけではないし、何よりブラック鎮守府では誰が旗艦でも大して戦況に影響はなかつたので那珂は出撃時にはいつも旗艦を死守していた。ゆえに、それ自体は別に問題はないのだが……。

「それで、センターに立つた那珂ちゃんは深海棲艦の注目を浴びて……すごいブーイングが飛んできて……ふひつ、ふひひひひ……」

「な、那珂ちゃん！ 戻ってきて那珂ちゃん！」

神通が声をかけるが、当の那珂はとてもアイドルがするべきではない表情でトリップしていた。そう。この那珂、ブラック鎮守府での日々でそうなつたのかは不明だが……いや、神通が思い返す限りでは

最初からだつた気がする。

彼女、凄まじい被虐趣味の持ち主なのである。開戦して早々わざと敵陣のド真ん中に突っ込み、集中攻撃されることに愉悦を感じるヤバい艦娘と化していた。前世で培つた回避技能で敵の弾を回避しながら凹になりつつ、身体ギリギリを弾が掠めていくのに快感を感じているのである。彼女が積極的に凹になり敵弾の的となり続けることで結果的には味方を有利に導いていたのが始末に負えない。しかも戦況的には勝ちが確定してくると被虐趣味を満たすためにわざと被弾して勝手に戦線離脱することも多々あつた。ある意味ではブラック鎮守府一の問題児である。

「……あれ？ 那珂ちゃんまた向こうにいつちやつてた？」

「やつと戻ってきた……アイドルがしていい顔じやなかつたわよ那珂ちゃん」

「いつけなーい、しつかりしないと」

「てへ☆」と舌を出して笑う那珂に神通はため息をついた。この妹を相手にするのは、はつきり言つて疲れるのだ。

「でも眞面目な話、オフが長すぎると那珂ちゃんも身体が鈍つちゃうよおー」

「全くだわ。さつさと出撃させなさいっての！」

二人の意見にも神通は納得できるが、しかし結局のところ、所詮は兵器でしかない自分たちではどうしようもない。いつ来るかもわからぬ提督からの命令を待つてただ待機しているしかなかつた。

「そいいえば、この鎮守府は解体の音が聞こえないねえ。あそこじや結構聞こえてたのにー」

「那珂ちゃん……解体なんてそ有るものじゃないのよ

「そつかー」

ブラック鎮守府では提督に意見した艦娘が解体処分されるのが日常であつたが、普通の鎮守府では解体などそういうだらう。全くないわけではなくとも、さすがに意見しただけで解体されるようなことは有り得まい。

「あのハンマーの音、那珂ちゃんは好きなんだけどなあ」

「アレが好きって、那珂の趣味は私たちにはちょっと理解しがたい領域ね」

「うふふ、カーン… カーン… カーン… つて、あの本能から震え上がるような音、ゾクゾクしちゃうんですよ」

川内がごちるようすに、普通の艦娘からすればあのハンマーの音は艦娘を恐怖させ、敬遠されるものである。しかし、そこは被虐趣味の那珂、そんな本能的な怯えすら快感にしてしまうようであつた。ダメだこりや。

「那珂ちゃんじやない『那珂』が解体場に連れていかれる時のあの怯えた表情、思い出すだけで……ふひひ」

「ちよつと神通、この娘なんとかなさい」

「そ、そう言われても……」

被虐趣味を姉二人にドン引かれても那珂は氣にも留めない。アイドル精神はどこへ行つた。

「知つてる？ 那珂ちゃんは解体されると燃2弾4鋼11になるのです。ああなつちやうまでどんな過程があるのかと思うと……」

『那珂』はやたらと建造で現れる艦娘として有名であり、それゆえ解体に回される艦娘の筆頭であつた。今彼女が語つた『燃2弾4鋼11』は一部では那珂を表す隠語にまでなつていてるほどである。

実際、前任のブラック鎮守府でもしょっちゅう建造で現れた那珂が解体に回され泣き叫んでいた。この那珂はそんな自身の同型艦の末路にすら快樂を感じているのだからどうしようもない。ある意味では頼もしいとも言えるが。

「そう……那珂ちゃんが解体場に連れていかれて……あのハンマーが振り上げられて……そして……ふひ、ふひひひひ……」

「な、那珂ちゃんつ!? また!」

「あー、夜戦がしたい。誰かが夜戦に行つた時に勝手に出撃しようかしら……戦果を譲つてあげれば口止めになるでしょ……」

「姉さんも何言つてるんですけどあああ!」

——個性が強すぎる姉と妹の板挟みになり、気苦労が絶えない日々を過ごす神通であつた。

ダメ鎮守府製造機

私、雷は新たな鎮守府にいた。真っ当な鎮守府であるこの場所は、とても穏やかな時間が流れている。世間で言うところの『ブラック鎮守府』とやらであるらしい場所にいた私は、この鎮守府の艦娘たちからとても気を遣われている。

——曰く、ここはあんな地獄じやない。

——曰く、もう常に任務をこなす日々は過ごさなくていい。

——曰く、今は心身を休めてゆつくり傷を癒して欲しい。

そうしてこの鎮守府の皆はとても私を優しく扱ってくれる。しかし私はそれに対し酷い虚無感を覚えていた。

(こんななんじやダメよ。私が求めてるのはこんな日常じやない……)



——私が覚えている最初の記憶は、鎮守府に着任してすぐに私の口上すら聞かず出撃命令を出す不機嫌そうな司令官の姿だった。私は早速必要とされている事に喜んで即座に頷き、仲間の艦娘たちと一緒に出撃した。彼女たちの瞳に光が無いことなど気にも留めていかなかった。

人の身体は勝手がわからず初陣は中破になってしまったが、無事に勝利して帰投すると、入渠もせず司令官から即座に再度の出撃命令が下った。私はこれにも喜んで頷いた。他の皆の瞳に気付いたのはこの時だったと思う。私は彼女たちにこう声をかけた。

「元気ないわね。そんなんじやダメよ！」

しかし彼女たちから返答は無かつた。よほど疲れているのかと思つた私は、ここは自分に任せるように言い彼女たちを置いて単艦出撃した。私一人での戦場ではあつたが、二度目では初陣とは比べものにならないほど上手く動け、一度も被弾せず勝利した。

鎮守府に帰投すると、仲間たちが目に涙を浮かべて私に礼を言つてきたので、私は笑つてこう返した。

「もーっと私に頼つていいのよ！」

そう言うとますます泣かれてしまった。私は彼女たちを宥めた後、司令官に喜びを表しながら報告した。司令官は元気の有り余つて、私のを見て少し考え込み、もう一度私に出撃を命じた。そんなにも必要とされているのが嬉しく、私は自身が中破している事も忘れて頷いた。

「雷、司令官の為に出撃しちゃうねっ！」

そのまま単艦出撃しようとすると、まだ目に涙が溜まつたままの皆さんから必死で引き止められ、今度は連れていってくれと言われたので皆と共に出撃したが、むしろ、もつと私に彼女たちの分の任務を押し付けてくれて良いのにと思った。

「雷は大丈夫なんだから！」

三度目の出撃は一度目よりかなり皆の動きが良く、一番スマーズに終わつた。私が再び笑顔で報告すると、司令官に次からは中破以上になつたら許可を取らず入渠していいと言われた。私を沈めるのは惜しいとのことだつた。私はそれだけに頼られている事に喜びを感じた。

その後、入渠を終えた私は司令官に自由時間をもらい、ここで初めて鎮守府を見て回つた。鎮守府の内部はかなり汚れており、艦娘のほとんどは一緒に出撃した皆と同じく瞳に光が無かつた。

返答のできる艦娘から話を聞くと、司令官に酷使され疲弊している事だつた。酷使されるほど頼られて、いるのに疲弊するという感覚がよくわからなかつた私は、むしろ最高の環境だとと思うと言うとまるで化け物でも見るような顔をされた。

「助けるわ。私に任せて！」

自由時間という事は私の好きなようにしていい時間という事だ。だから私はそんなに任務が嫌なら自分に押し付けて欲しい。自分を頼つて欲しい。私はそう言つて彼女たちを説き伏せた。

出撃したくないと言う艦娘がいれば代わりに出撃し、遠征が嫌だと嘆く艦娘がいれば代わりに遠征に行つた。最初は私に対して引け目を感じていた様子の彼女たちだが、私が全く苦にしていない様子

を見るとますます化け物を見る目で見られるようになつていった。

しかし私は特に気にもしなかつた。どんな目で見られようと、理由がなんであろうと、誰かに頼られるというのは私にとつて最高の喜びだつたから。

司令官からの命令が下ればそれをこなし、自由時間が来れば任務を嫌がる艦娘を探してその代行を引き受ける。そんな日々を過ごしているうちに、いつしか私は鎮守府でも古参の存在になつていた。

ある日、司令官がいつも以上に不機嫌だつたので事情を聞くと、秘書艦にした艦娘が逃亡したとの事だつた。この鎮守府で沈まずにいる艦娘は戦闘狂か兵器思考の強い艦娘ばかりで、その娘たちに秘書艦の仕事は到底できないので適当に戦力外の艦娘を見繕つて秘書艦をやらせていたが、司令官から押し付けられる仕事量に耐えられずに逃亡したらしい。それを聞いた私は即座に言つた。

「司令官、私が居るじゃない！」

逃げ出したくなるほど仕事を押し付けられるなど最高ではないか。私は喜んで秘書艦を買って出た。司令官は少し悩んだようだが、私に秘書艦を任せてくれた。

最初に頼まれたのは机の上に向こうが見えなくなるほど大量に積まれた膨大な書類の処理だつた。私は喜んで引き受け、一日かけてその全てを処理した。頼られた喜びで眠ろうとも思わなかつた。

翌日、起床してきた司令官に書類を全て処理した事を報告すると非常に驚かれた。前任の秘書艦はあの書類を押し付けられた事が逃亡理由だつたらしい。あの程度は全く苦にならない私にはよくわからぬ事だつた。

その後も任務と並行して秘書艦の仕事をこなしたが、一つ私にとつて残念な事があつた。秘書艦を務めてから自由時間が少なくなつたため以前のように艦娘たちに頼つてもう機会が激減してしまつたのだ。

（私が何人もいれば良いのに）

何気なくそう思考した私はその時、ふとそれが実現可能な事に気付いた。艦娘である私は同時に複数人存在する事ができる。正確には

それは私ではないが、自身の同一艦の喜びは私の喜びに等しい。

良い考えだと思った私は早速、司令官に許可を取り何度か建造を行つて私と同じ『雷』を生み出した。

しかし、その結果は私の期待したものにはならなかつた。私ではない『雷』はたつた一日中出撃していただけで呆氣なく沈んでしまつたのだ。その後も何度も何度か『雷』を建造してみたが全て結果は同じだつた。

一度、どうして沈んでしまうのか気になつて『雷』の出撃に同行したが、どうも酷使による疲労が原因のようで、『雷』は私がよく見るあの光の無い目をしていた。一日中ぶつ通しで出撃するほど頼られているのになぜ疲労など感じ、あまつさえあんな目をするようになるのか、私は同一艦でありますながら彼女たちの事が理解できなかつた。結局、私はその後『雷』に期待するのはやめ、『雷』が建造されたら全て解体に回した。

『雷』については上手くいかなかつたが、その後も私は秘書艦も任務も遠征も全てにおいて頼られる充実した日々を過ごした。一番嬉しかつたのは、司令官が本来は艦娘の仕事ではない身の回りの雑事まで任せてくれるようになつた事だつた。

私は喜んで司令官の世話をした。司令官のするべき事は全て私が行い、司令官の欲しい物は全て私が用意した。

「雷、司令官の為にもつともおーっと働いちやうねっ！」

やがて、司令官は艦娘に下す命令を除いたほぼ全てを私に任せようになつた。考える事すら億劫な様子で私に何もかもを委ねる司令官の姿は、私にとつて至上の喜びだつた。



そんなあの鎮守府での幸福な日々も、私の遠征中に行われた深海棲艦の鎮守府襲撃によつて終わりを告げ、司令官も戦死した。悲しかつたが、戦争である以上、こういう日が来るのは仕方ない事だつた。だから私は、新たに着任したこの鎮守府でまた一から頑張ろうと思つていたのに……。

(だれも私を必要としてくれない。皆が私に休んでいていいって言う……)

——違う。違うのだ。気遣いなんてしなくていい。休息なんていらない。

私はただ、頼りにされたい。私は私だけでは満たされないから、以外の誰かに求めて欲しい。

私がそう虚無感に苛まれていると、私のよく知る艦娘たちが私に近付いてきた。

「雷ちゃん、ここにいたのですね」

そう話し掛けてきたのは自身の妹である電。見れば、暁と響もいる。私を含めれば第六駆逐隊勢揃いだ。皆揃つてどうしたのだろうか。

「雷、少し気が引けるんだけど頼みたい事があるんだ……聞いてくれるかい？」

「最近、深海棲艦が手強いの。こう言うのも何だけど雷は私たちとは比べものにならないほど戦闘経験が豊富でしょ？ よければ、私たちに稽古をつけてほしいんだけど……引き受けてくれる？」

二人の口から発せられたその言葉に、私は心が満たされていくのを感じた。

(そう、これよ！ 私が欲しいのはこれなのよ！)

気が引けるなどとんでもない。むしろどんどん頼つて欲しい。稽古ぐらいいくらでもつけてあげるから。いや、稽古だけとは言わず、出撃も遠征も、何もかも私に押し付けてくれていい。

——あなたたちがすべき事は全て私が行うから。

——あなたたちが欲しい物は全て私があげるから。

そう、あなたたちは何もしなくていい。何も考えず、全てを私に任せてくれるだけでいい。そして私に甘えるだけ甘えて、私無しではいられなくなるほどドロドロに依存してくれればいい。

(——さあ、全てを私に委ねて？ 思考すら必要なくなるぐらいに私に溺れて？)

——そして私はこの鎮守府に来て初めての笑顔を浮かべ、いつも通

りに『あの言葉』を口にした。
「もーっと私に頼つていいのよ!」

24時間戦えますか

「うう……海に出たい……戦場の風に当たりたい……」

——ブラック鎮守府の生き残りの一人、初春型三番艦たる若葉は、新たに着任したホワイト鎮守府にて、与えられた自室で愛用の煙草をふかしながら唸っていた。そして戦いに飢えていた。

「時間は貴重だ。こうしている間にも事態は動いているのに……」

そう言いながら若葉は煙草の煙と共に大きく息を吐き出した。彼女も例によつてブラック鎮守府の被害者と見なされ、待機を命じられている艦娘である。

その科白だけを聞けば貴重な戦力を無駄にしているホワイトの現状に不満を持つてゐるよう見えるだろう。それは確かに事実ではあるのだが、しかしそれは彼女が海に出たがる直接的な理由ではなかつた。

「出撃したい……なんなら演習でもいい……あの砲撃の嵐の渦中に飛び込みたい……」

白い肌を紅潮させながらそう語る彼女の様子はどこぞの戦闘狂によく似ているが、しかし彼女が戦場を求める理由はある意味ではもつと救えないものであつた。

「痛みを……痛みを味わいたい……誰か若葉を痛めつけてくれ……！」

……そう。彼女は筋金入りの被虐趣味。有り体に言えばドMであつた。元々、若葉という艦娘は被弾の際に「痛いぞ！……だが、悪くない」とか言い出す艦娘である。そつちの氣があるのでないかとは一部の提督の間で噂されていたが、この若葉に関して言えばそれは正解であつた。

「なぜだ……？　なぜ出撃許可が下りないんだ……？」

それは彼女にとつて心の底からの疑問だつた。元々「24時間寝なくて大丈夫」などと言い出すワーカホリック気味な性格である彼女にとつては、提督とは艦娘を酷使するのが普通だし、艦娘は黙つてそれに従うのが当然だと思つていたからだ。

ゆえに、メンタルケアの為に出撃させないという対応自体が彼女にとつて理解の外であつた。兵器である艦娘の精神状態などを気にしている暇があるなら一隻でも多くの深海棲艦を沈めるべきではないのか？潰れたらまた新しく建造すればいいだけではないのだろうか。この辺りの感覚は彼女もまた兵器よりの思考であつた。

——だから休息など与えずにもつと酷使すべきだ。疲労していようが大破していようが無視して出撃させるべきなのだ。主に自分の性癖を満たす為に。そう思考する彼女はもう色々とヤバかつた。どうしてこんなになるまで放つておいたんだ。

「うう……帰りたい……ブラックでも何でもいい……あの酷使される日々に戻りたい……」

そう呟く彼女は本気でブラックな日々に戻りたがっていた。馬車馬の如く酷使され続けボロボロの身体で日々を過ごすという普通の艦娘には最悪の環境でもマゾの若葉にとつては最高の環境なのだ。やはりドMこそ最強の種族なのかもしれない。しかし肝心のブラック鎮守府自体が陥落し、ブラック提督も海の藻屑となってしまった以上はもはや叶わぬ夢であった。

「前提督……ブラックだと皆は言うが……彼はいい人だつた……若葉に生の充足を与えてくれた……」

艦娘を使い捨ての道具扱いする最低最悪のブラック提督も、真性のマゾの若葉にかかるべき評価である。おいホワイト、こいつをどうにかしろ。

——若葉の脳裏にブラック鎮守府での幸福？　な日々が過ぎる。

「24時間、寝なくても大丈夫」

その言葉を真に受けた提督に24時間ぶつ通しで酷使されるのが好きだ。

大破状態で命からがら帰投した直後に無慈悲な出撃命令を与えられた時など心が躍る。

敵が見当たらず安堵していたところに潜水艦から不意打ちされるのが好きだ。

足元もおぼつかないフラフラの自分に対して砲撃が直撃した時な

ど胸がすくような気持ちだつた。

機嫌の悪いブラック提督に理不尽に叱咤された挙げ句に72時間戦わされるのが好きだ。

あと一撃被弾すれば沈むだろう満身創痍の自分の真横を何度も何度も砲弾が掠めていく様など感動すら覚える。

疲労でヘトヘトになつているところを無理矢理海に蹴り出されて強引に出撃させられた時などもうたまらない。

本来ならば楽に沈められる格下の深海棲艦に疲労のせいでろくに攻撃を当てられずにこちらが難ぎ倒されるのも最高だ。

疲労を乗り越えてやつとの思いで撃破した直後にさらに格上の深海棲艦が現れた時など絶頂すら覚える。

理不尽な強さのflagship級に滅茶苦茶にされるのが好きだ。

必死に守るはずだった戦線が蹂躪され初陣の艦娘が狙われ沈められていく様はとてもとても悲しいものだ。

深海棲艦の物量に押し潰され殲滅するのが好きだ。

戦艦レ級に追いまわされ雑魚の様に海上を逃げ回るのは屈辱の極みだ。

「若葉が望む日々は……？ 地獄のような戦争は……？ 三千世界の鴉を殺す嵐のような闘争は……？」

暗いブラック鎮守府での日々に浸かってきた自分にただの戦争ではもはや足りない、と言わんばかりにそう呟く若葉であつたが、残念ながら艦娘の平穏な生活を重んじるホワイト鎮守府には彼女の思いは届かない。というか届いちやいけない。

「だが……なんだろうか……不思議な気分だ」

そしてここに来て若葉は何やら妙な感覚を味わつていた。使い捨てのように扱われるブラック鎮守府での待遇とはまた違う、確かに大切にされていると感じるのに自分の思いは伝わらない悲しみ。

戦える力がありながら何ひとつ有意義な時間を過ごせないもどかしさ。一度戦場に出れば鬼神の如き力を発揮できる自分が腫れ物のように扱われ、ただの無駄飯食らいに成り下がる屈辱。

「おお、そうか……これが放置プレイというやつだな……！　うん、悪くない」

そう。このクールマゾは、ホワイト鎮守府で無為な時間を過ごすうちに、あろうことか新たな世界の扉を開きかけていた。ダメだこいつ、早くなんとかしないと。

「でもやつぱり生温いな、もつと痛みが欲しい。痛みと快樂こそが若葉を高みへ押し上げてくれる」

クールな態度でそんな色々と手遅れな独白をする若葉だったが、自分が煙草を吸っている事を失念したのだろうか。姿勢を変えた拍子に煙草の火が彼女の白い肌に触れる。当人の不注意とはいえ年端もゆかぬ少女の肌が焼かれるという、常人が見れば悲鳴を上げそうな事態だ。

「あつっつっ!!　煙草あつっつ!!」

そんな予想外の方向からのダメージに普段のクールな仮面を脱ぎ捨てて大きく腕を振つて煙草を投げ捨て、その熱さを逃がす若葉。条件反射とはいえキャラが崩れかけていた。

「熱い、熱いぞっ！」

八つ当たり気味にそう吐き捨て、床に落ちた煙草を踏み消す若葉。心なしか、その肌はやや紅潮しており、さらに息もどこか荒い。

「全く、熱いじゃないか……だが、悪くない」

この期に及んで若葉が抱く感想は結局のところそれに帰結するのであつた。ダメだこりや。

渡る世間はクズばかり

「あーもう、バカばっかり！」

前世にて様々な作戦に参加してきた歴戦の主力駆逐艦たる古豪の艦、朝潮型10番艦『霞』は、はばかりなく周囲への罵倒を口にした。ブラック鎮守府を生き残り新たな鎮守府に着任した彼女への対応として司令官に命じられた「無期限待機」は、ただでさえ激情型である彼女の怒りを煽るには十分すぎる火薬であった。

「この大事な時に私たちを待機させるつてどういう事なのよ、あのクズ！」

あろうことか自身の司令官をクズ呼ばわりする霞であるが、これは彼女の口癖のようなものだ。おかげでブラック鎮守府では霞がそういう艦娘だと提督が理解するまでに数十隻の霞が解体処分されたのだが。

さておき、霞に限らず、ブラック鎮守府の生き残りである艦娘には全員無期限待機が命じられている。メンタルケアの為とかいうふざけた理由でだ。

——もう戦わなくてもいい。ゆつくり身心を休めてくれればいい。そう優しく話しかけられる度に、霞は背に虫が這い回るようなおぞましい感覚に襲われた。

『君はブラック鎮守府で奴隸のように酷使されてきた』ですって？
だから何よ！』

兵器が戦場で酷使されたからどうだというのだ。知った風な口を利きやがつて。霞は陰口が嫌いだが、的外れな同情も嫌いだった。自身が何とも思っていない事をさも悲劇のように語られるほどどうつとうしい事もない。

大体、これが心身に傷を負った艦娘の態度に見えるのだろうかあいつらは？

「全く、気に入らないいつたら！」

霞が聞いたところによれば、どうもこの扱いはブラック鎮守府を生き残った艦娘に対する最も無難な処置らしい。なんでも、ブラック鎮

守府で酷使された船娘は人間への不信感を抱いている場合も多く、出撃させようとすると過剰に怯えたり、場合によつては脱走や反逆する輩までいるらしい。

それを聞いた霞の感想はといえば。

「はあ!? それで逆ギレ? だらしないつたら!」

これしかない。戦の為の道具が戦場で使われる。当たり前ではないか。使われる事に感謝こそすれど、恨む理由などひとつもない。

それが『戦争の為の兵器を戦場で酷使したら人間不信になつて反逆されました』などと、これが逆ギレでなくてなんだというのだ。

「人の身体を得た途端にこれだなんてね! 心があるつていつても、それで兵器の本分を忘れてたら意味が無いじゃない!」

戦を忌避して戦場を拒む兵器など聞いた事がない。人の身心を得ただけでこの有様なら、まだ物言わぬ艦だつた頃の方がマシだ。いくら意思を得ても兵器として満足に運用できないのでは意味がない。戦力として不確定要素が多すぎる。

深海棲艦と戦えるのが艦娘だから使われているが、万一、艦娘無しでも深海棲艦と戦える兵器などが開発されれば、艦娘は単なる扱い辛い兵器に成り下がるだろう。人間様の意思に逆らう兵器など。「そんなクズどものせいでこんな采配が普通になつてるなんて……本つ当に迷惑だわ!」

忌々しい事に、周囲の反応を見る限りでは自分のような考え方の艦娘の方が稀少らしく、どうにも『不良品』の方が多数を占めるようだ。全く以て嘆かわしい。そのような兵器とも呼べない役立たずは刈り取るべきだ。愛すべき艦隊の害虫を!

「クズどもめ! 兵器のくせに戦うのが嫌だつていうなら改修素材にでもなりなさいよ!」

絶対にそちらの方が建設的であると思うが、そういう艦娘が改修素材にされる事はほとんどないらしい。理由は簡単、本人が嫌がるからだ。つまりは、そいつらは戦うのが嫌なのではない、消えるのが嫌なだけだ。

そして提督側も、「命は大切にすべき」という真っ当すぎるくらい

真つ当な倫理を以てそれを容認する。全くお優しい事だ。その優しさに涙が出て来る。

「全く大した博愛主義だわ！ 殺しが商売なのも忘れたお嬢様方が！」

霞は怒りのままにそう吐き捨てる。ああ、確かに人命は大切にすべきだ。あの大戦中、地獄のような戦場で多くの兵士の人命を救つてきた自分も、命の尊さなど今さら教えられるまでもなく承知しているつもりである。

だが、艦娘は人間ではない。

鎮守府のドックに鋼材とボーキサイトをかき集めて弾薬と燃料をぶち込んで生まれるのが自分たち艦娘だ。替えの利く消耗品であり殺戮の為の機械だ。殺さなければ存在する価値はない！

「戦争を嫌がる兵器だなんて、冗談にしても最悪だわ。惨めよね！」

戦艦の誇りを忘れた我が身だけが可愛いあばずれどもめ。

戦場に出ない艦娘など鉄クズ以下だ。廃棄されるべきゴミだ。この地球上で最も価値の無い存在だ。掃き溜めのガラクタをかき集めた値打ちしかない！

「私たちは替えが利くんだから、ガンガン酷使して、私たちもそれを受け入れるべきなのよ！」

人権だと人命だと、使う側も使われる側もいちいちそのようなものを考慮する必要はないのだ。どうせ艦娘は人間ではないのだから。余計な感傷など必要ない。

それを善良な提督らがなまじつか艦娘を人間のように扱い、艦娘側もその扱いを当然のように思つてしまふから、艦娘を酷使するのはブラックだとか、戦場で酷使される艦娘は被害者だとかそういう『歪み』が生まれてしまうのだ。

単に駒が兵士から艦娘に変わっただけではないか。むしろ、兵士が必要なくなり兵器が自ら動けるようになつたのだ。消費されるのは兵器である艦娘だけ。人命が失われないのだから良心的ですらあるというのに。

そういう意味においてはあのクズ司令官は実にわかっている人物

だつた。人格はまごうことなきクズそのものであつたし、その采配も迷惑極まりないものばかりだつたが、一方で彼は公平であつた。あの司令官にかかれど、どんな艦娘だろうと等しく使い捨ての消耗品でしかない。

世間ではそれをブラックだと叫うらしいし、ホワイト曰く艦娘は被害者らしいが、霞から言わせれば艦娘の命などあの程度の扱いといいのだ。

そう。駆逐艦、空母、戦艦、潜水艦——全て平等に価値がない！「戦場に向かつて、一度と戻らない艦娘がいる。それの何が問題なのかしらね」

そもそも艦娘は沈むものだ。沈むために我々は存在するというのに、それを忌避し戦場に出さずにおくなど全く以て理解不能である。人類を守る為に沈んだとしても、その遺志は永遠に受け継がれて行くのに。

まあ、生産コストの問題がある以上、不必要的消耗はできる限り避けるべきだが……しかし現状では自分たちの材料はパワースポットとやらからいくらでも手に入るし、何より深海棲艦を倒すと文字通り湧き出てくるのだ。普通の兵器と比べれば補充は遙かに容易だ。

どちらかと言えば生産とレベルアップにかかる時間が問題であろう。そういう意味においても、自分や不良品どものような高レベルの艦娘は積極的に前線に出し、時間の浪費や味方の消耗を抑えるべきだというのに。

「ああ、嫌だわ。戦場を嫌う艦娘も、それを優しく慰める提督も」

全く以て無駄の極みだ。そもそも、提督らはブラック出身の艦娘らに優しくしているようだが、霞からすれば、大した利益もなく善意を示される方が信用ならない。そんな気色悪い事になるよりも、戦争の為の駒として扱われる方がよほどわかりやすい。

「戦場で半端な優しさは敵に付け入る隙を与える甘さにしかならないのに……」

——優しさは確かに美德だ。ああ、その思いやりで救われる者も大勢居よう。だがその気遣いは、戦争という地獄において、時には味方

を食む毒とも成り得るのだ。そう、『あの時』のように。

「あーもう、バカばっかり！」

——前世で戦友に訪れたかつての悲劇を思い返し、霞はもう一度現状への罵倒を口にするのだつた。

オリヨクルは衰退しました

「むー、ひまー！ 暇ですってー！」

「そうですね……今までが今まででしたからなおさらです」

ある鎮守府の一室で頬を膨らませて不満を表現する小さな影と、それに控えめに同意を示すアイヌ風の衣装に身を包んだ影があつた。呂号第500潜水艦、通称『呂500』と、改装され改母にまで至った給油艦と飛行艇母艦の力を併せ持つ『神威』である。

共に外国生まれという事しか接点のなさそうな彼女らはしかし、ここに来る前に所属していたブラック鎮守府では、顔を合わせない日は無いほど見知った関係であつた。ただ、ホワイト鎮守府に異動して以来、こうして話すのはこの日が初めてであつた。

「疲労しないというのも妙な感じですね。前は疲労したままぶつ通しで出撃してましたし」

「そもそも、ろーちゃんたちが疲労していないのがおかしいです。絶対出撃するべきですって！」

ブラック鎮守府出身の二人は例によつてホワイトのテンプレ対応である「無期限待機」を命じられていたが、無難な感想を呟く神威に対し、手足を振りながらその現状に不満を訴える呂500。今にも「がるるー」と唸り声を上げそうな彼女は出撃できないのが相当気に入らないようである。

「うーん、でもろーちゃん。世間では疲労したら休む。これが普通みたいですよ？ 今はほら、充電期間ということで」

「でも、健康な艦娘を二人も遊ばせておくのは、どう考えても非イ効率的ですって」

「ま、まあまあ……ホワイトの方々も親切心でやつてくれてる事ですし」

神威がホワイト鎮守府の方針に理解を示す一方で、呂500は効率の問題としてホワイトの方針に否定的な態度を崩さない。彼女がそう考えるのは以前のブラック鎮守府での自分の役割が心身に染み付いてしまっているからだ。

「もつと時間は有効に使うべきですって！ ろーちゃんとカモーラさんがこの鎮守府に来てから何日経つたと思います？」

「ええと……10日ですか？」

妙なイントネーションで呼ばれたのを氣にも留めず神威がそう答えると、呂500は「そうです！」と身を乗り出し神威に顔を寄せる。「10日ですよ、10日！ 10日もあれば、三重に7000回は出かけられますって！」

「そ、そうですね……あはは……」

呂500の口から発せられた奴隸の極地のような予想通りすぎる台詞に神威は苦笑するしかない。彼女の言う『三重』とは、鎮守府近海の『製油所地帯沿岸』に存在する、艦娘の燃料を手に入れられるパワースポットのことだ。この周辺の海域は日本列島近海に酷似しており、このパワースポットの位置がちょうど日本の三重県に相当する事から神威たちはここを『三重』と呼んでいた。

ブラック提督はここが最も燃料の取得に効率が良いパワースポットとして認知していたようで、神威と呂500は暇さえあれば他の艦娘と共に艦隊を組んでは一日中ぶつ通しで三重に通っていた。当然、ブラック鎮守府という場所で艦娘の疲労など配慮されるわけもなく、彼女らは全く休む事も無いまま、出撃しては帰投、出撃しては帰投を機械的に繰り返して燃料を集めていた。

その影響で、当初は疲労で回らなかつた頭と身体も今では疲労などおかまいなしで十全に動かせるようになつたのは喜んでいいのか悲しんでいいのかわからない。一週間もすれば提督の命令が無くとも勝手に三重に行つていたし、慣れとは恐ろしいものだ。

おかげでむしろ全く疲労が無いという健康状態の方に違和感を覚えるレベルである。呂500の「自分たちが疲労していないのがおかしい」発言といい、完全に職業病であった。

「しかし三重クルージングですか。この鎮守府に着任してから今まで行つていたと仮定すると……」

ここで神威は冷静に三重に出撃していた場合の計算を始める。

「時間あたりの取得量が1500と仮定して……」

さらつと口にしているが、この時間あたり1500というものは一切休息無しで一時間ずっと出撃と帰投を繰り返した場合の取得量である。もはや休息無しのは前提条件のようだ。

「10日ですから……36万？ うわ、もつたいない」

思わずそう零した神威に呂500が「ですよね！」と目を輝かせながら迫つた。

「それでも1日3万6000もの本来得られるはずの燃料を無駄にしているんですよ？ どう考へても非効率ですって！」

ブラックで過ごした日々の影響によつて、すっかり効率に煩い潜水艦と化している呂500が腕を振つて力説する。

「こうしている間にもどこかの海域で戦争は行われているんです！ 明日の勝利の為に、日々の1分1秒を価値ある時間にすべきだと思いますつて！」

「ろーちゃん……」

ブラック鎮守府へ着任直後からの付き合いである呂500に対して、神威は『こんなに立派になつて』と『すっかり変わり果てて』との思いを同時に抱いていた。

「この鎮守府には睦月型の皆さんもいますし、今すぐにでも三重に岡かけるべきです、はい！」

呂500が睦月型の名前を出したのは、彼女らが燃費に優れる艦娘として知られている為だ。燃費を極限まで抑える事により最大効率で燃料を集められる事から、神威と呂500と艦隊を組んでいたのはいつも睦月型改二の四人であつた。実を言うと睦月らもブラック鎮守府を生き残つたが、この鎮守府には睦月型が全員居た為に神威らとは別の鎮守府に異動していつたと聞く。

「それなんだけど……ろーちゃん、実際のところはこここの睦月さんたちと組んでも前みたいな燃料取得量は無理だと思います」

「えっ!? なんで!? 大発と内火艇は揃つてますよ！」

神威の思わぬ言葉に呂500が驚愕する。神威はそんな彼女に以前のようにいかない理由を説明した。

「まず、この鎮守府の皆が疲労状態に慣れていないというのがひと

つ

「でも、それはいざれ慣れればいいだけじゃないですか？」

「まあ、そうね」

さも当たり前のように言う二人であるが、そもそも疲労状態に慣れるとほど酷使される事自体がホワイト鎮守府では異常である。しかし残念ながらそれを指摘できる存在はこの場にいなかつた。『無理だとと思うから無理なのだ』がブラックに染まりきつてしまつた彼女たちの理論である。

「本題はこつちね。この鎮守府では誰もケツコンカツコカリをしていない」

「あ」

その言葉に呂500は自分と神威の指に輝く物体——ケツコン指輪を見た。二人がいたブラック鎮守府では戦力向上の為に最高レベルまで生き延びた有能な艦娘は全員がケツコンしており、この二人や、共に三重クルージングに行つた睦月型の四人もケツコン済みの艦娘だつたが——この鎮守府ではそうではない。

「ケツコンするとしないとでは、艦娘の性能にはかなりの差が出るわ。もちろん、燃費も」

三重クルージングはその性質上出撃回数がとにかく多くなる。それだけに、出撃する艦娘の燃費というのはかなり重要だ。

よつて、艦隊の顔触れが同じでもケツコン済み艦娘と未ケツコン艦娘とでは最終的な収入に露骨な差が出る。

「こ、こんなバカな……ていうか、なんでこの鎮守府の艦娘は誰もケツコンしないんですか!?」

その答えはケツコンが提督と艦娘の人生の一大イベントであり、気軽に使うものではないからである。

しかし呂500には本気で理解不能であつた。ケツコンすれば艦娘の性能も向上して燃費も良くなつてレベルも更に上がり、良い事づくめではないか。やらない理由が見当たらぬ。その意見は神威も同じらしく、不思議そうに首を傾げた。

「それは……なんでしょう？ ケツコンに必要な『書類一式と指輪』

が大本営から一組しか支給されないからとか？」

「あんなもののアイテム屋でいくらでも売つてるじゃないですかっ！」

二人が頭を抱えるのも当然であろう。ブラツク鎮守府出身の彼女たちにとつて、ケツコンとは艦娘の性能をより引き出す為の儀式でしかない。それが彼女たちにとつての常識だからだ。ゆえに、なぜホワイト鎮守府はさつさとケツコンしないのか、二人には全く以て理解の外であつた。

まさか兵器と人間の間にロマンスが成立するというのが世間の提督と艦娘の普通の認識であるなどとは、二人は頭の片隅にすら思い浮かんでいなかつた。

「まあ、ホワイトの事はよくわかりませんけど……ともかく以前のように最大効率の三重クルージングは不可能という事ですね」

「Ohなんてこつたねいん！」こうなつたら三重は諦めて、でつちたちに声を

かけてキスの方に……」

呂500の言うキスとは『北方海域』のキス島沖を指す。こちらもパワースポットで弾薬が手に入り、三重と合わせブラツク鎮守府では重宝されていた。

ただし神威ら固定メンバーが担当していた三重と異なり、その内容は三重での深海棲艦撃破によつて着任した艦娘に応急修理要員をつけて単艦出撃させ、弾薬回収後に解体するというあんまりなものだったが。

「ろーちゃん、今さら言うのもなんだけど……そもそも問題として私たちに出撃許可が出てないから無理ですよ」

「Ohなんてこつたねいん!!」

結局盛大に時間を無駄にした事にじだんだを踏む呂500であつた。

ホワイトに英雄譚を求めるのは間違っているだろ
うか

「あー!! ゼーんぜん記事になりそうなネタがないですよう!!」

「そーねー。秋雲さんもネタが欲しいわ。全然筆が進まないもん」

鎮守府の一室で不満げに声を上げたのは、個性的な者が多い艦娘たちの中でも何かと問題児として知られる二人。青葉と秋雲であつた。型も艦種も全く異なる二人が同室なのは、トラブルメーカー同士でまとめられたため……ではなく、この一人がこの鎮守府とは別のブラック鎮守府から引き取られたという事情からであつた。

彼女たちは前世の逸話からか記者や作家としての活動に熱心な事で有名であるが、ブラック出身であるこの二人もその例に漏れず、記事や本の執筆を何よりの生き甲斐としていた。

しかし、この鎮守府に異動してきて以降、彼女らの趣味は全く以て進歩がなかつた。

「あーでも、最近こここの提督と初期艦がケツコンするとか聞いたわね」「そんなどうでもいいゴシップなんて記事にする価値もないですよおー! だいたい、司令官と艦娘がケツコンしたからなんだつていうんですか。単なる戦力増強じやないですかあー」

「いや、ホワイトでは一大ニュースらしいわよ? よく知らないけど」

通常の青葉と秋雲なら飛び付きそうなケツコンのニュースはしかし、彼女らにとつては話のネタにもならないような些末事でしかない。ブラック出身の二人の感覚からすればケツコンなど艦娘の性能向上のための策のひとつでしかない。実際、二人もブラック提督とケツコンしていた。そのせいもあって、真っ当な鎮守府にとつてケツコンがどれほど注目を浴びる出来事なのか二人はよくわかつていなかつた。

しかし、それを差し引いても二人は日常的な話題への興味は皆無であつた。

「青葉が書きたい記事はそういうのじゃないんです! 青葉は、そう

！英雄の記事が書きたい！　末期的な戦場という地獄の真つ只中
だからこそ生まれる英雄の声が聞きたいんです！」

「そーねー。秋雲さんも描きたいわ。クソッタレな深海棲艦どもを、
片つ端から蹴散らしていく戦女神の姿を」

ブラック鎮守府でも比較的古参に属していた二人は、それこそ地獄
そのものの光景を見てきた。無謀極まる運用に、使い捨ての如く沈ん
でいく艦娘。

だが、その地獄の最中にあつて、それを物ともせずに、提督の理不
尽な命令を容易く完遂し、鎮守府に勝利をもたらす英雄が生まれるの
を見てきた。

また、提督に『死ね』と命じられて、その命令に何一つ不服を示す
事無く沈み、その身を犠牲に得た、たつた数刻によつて同胞に勝利を
もたらし、一足先に自由になつた英雄がいた事を知つていた。

二人はその英雄たちの活躍に魅せられ、その姿を記事や本として書
き記してきたのだ。

「青葉は期待していたんです。司令官としては下の下だつたあの人の中
下でもあれだけの英雄が生まれた。なら、真つ当な艦隊運用ができる
司令官の鎮守府にはどれほど素晴らしい艦娘がいるんだろうと。な
のに……」

「真つ当な艦隊運用に真つ当な戦術。考えてみれば、そんな鎮守府で
英雄が生まれるはずがないのよねえ」

ホワイト鎮守府の真つ当な艦隊運用は、ブラック鎮守府とは比べる
までもなく素晴らしいものだ。しかし、その環境では英雄と呼べるほど
突出した戦果を挙げる存在が生まれる土壤がなかつた。そう、英雄
は英雄が必要とされる環境でしか現れない。

「どうか、土台からして無理な話だつたのよ。この鎮守府の娘たち、
秋雲さんたちにあつさり負けるぐらいだもの」

「そうですね……一日に二桁しか出撃しないような鎮守府ではそんな
ものなのかもしません」

ブラック鎮守府では下から数えた方が早い実力だつた青葉と秋雲
だが、それでも初期から地獄を生き延びてきた猛者だ。ホワイト鎮守

府の艦娘たちとは修羅場を潜り抜けてきた数が違う。異動してきてくれる何度も行つたこの鎮守府の艦娘たちとの演習では青葉と秋雲の二人だけで一部隊に圧勝していた。そもそも大破しただけで撤退が許される環境にいる艦娘たちに青葉らが負けるはずもなかつた。そんな鎮守府が彼女らの期待に応えられるはずもない。

「鎮守府としてはこれでいいんだと思うわ。でも、それじゃ心に響いてこない。ああ、平穏な日常つていうのがこんなに退屈だなんて」「青葉もです。ああ、非日常が欲しい。数多の英雄を生み出したあの地獄に戻りたい……」

何度か、ブラック鎮守府での日々を思い返して記事や本を書こうとした事はある。だが、それではどうしても創作じみた物になつてしまふ。それでは駄目だ。二人が書きたいのは、英雄たちの生の物語。そこに誇張や妄想が混じつては意味がない。

「ああ、インスピレーションが湧かない。あの鎮守府にいた頃は、どんな創作も陳腐に思えるぐらい英雄譚に溢れていたのに」

「日常が魂を腐らせるなんて青葉、知りませんでした。ああ、日々を過ごしているだけで魂を揺さぶられたあの鎮守府が懐かしい」

艦娘を運用する鎮守府としてはこれが正常なのだろう。だが、正常では駄目なのだ。平穏無事な日常では彼女たちは満足できない。まともでいるなどという贅沢は不用なのだ。

——血と硝煙に塗れ、悲鳴と銃声が飛び交うあの地獄、その狂気の最中で戦線を切り開いてゆく英雄の姿を知つてゐるから。あの姿に魅せられてしまつては、あらゆる日常が児戯に思えてしまうから。

「足柄さんや川内さん、どうしているかしら。ああ、彼女たちの物語が描きたいわ。狂氣こそを正気として戦神となるあの姿を」「ああ、青葉は英雄の姿を伝えたい！ 彼女たちの記憶、彼女たちの存在を残したい！ 心震わせ、魂を揺さぶるあの姿をこのレンズに写したいのに！」

——生温い日常に浸かりながら、彼女たちは今も何処かで戦場に身を投じてゐるであろう英雄の姿を思い浮かべるのだった。

満潮は期待しない

「はあ……また死に損なつたわ……こういう巡り合わせの星にでも生まれたのかしら」

駆逐艦、満潮。彼女もまた、ブラック鎮守府の日々を生き残り、この新たな鎮守府へと着任した艦娘だ。

「まあ……私の修理中に艦隊全滅、なんてならなかつただけマシなのかしら」

前世では入渠中に駆逐隊全滅の経験をしたこともあるが、それを考えれば、鎮守府は壊滅し、提督も戦死してしまつたとはいえ、それなりの艦娘が生存し各々が別々の鎮守府に引き取られていつただけでも幸運と言えるのかもしれないが。

しかし、この鎮守府の提督から下された命令には、未だに納得がいっていない。

『無期限待機』つて……なにそれ、意味わかんない……私が出なきや話にならないじゃない……』

満潮は、その言葉を思い出すだけで腹立たしく思えてくる。この鎮守府の連中は、あろうことか、この『満潮』に対して、出撃を禁じる命令を下したのだ。

「私は艦娘よ？ 兵器として生まれてきたの！ なのになんで戦つちやいけないわけ！」

いくら叫んでも、それで命令が撤回されるわけもなく。満潮はこの鎮守府に着任して数日を過ごした。しかし、やはりどうしても納得いかない。なぜ、自分が戦うことを禁じられなければならないのか。

「それとも、無能な兵器に用はないってわけ？」ああそう、私じや力不足つてこと？ や、そうだとしてもこんな命令は無いでしようよ

もし自分が国防を任せるとに戦力として不安だというなら、改修素材にするでも、解体して新たな艦娘の建造費用にでもすればいいのだ。そうせずに待機命令など出す意味がわからない。満足に運用できない兵器など、維持しておく意味もないはずだ。

「もう……最悪……」

思わず愚痴が出てしまう。だがそれも仕方のないことだ。この数日間、ただひたすらに暇だった。何せ満潮は日常の過ごし方など知らない。今までずっと戦い続けてきたのだから当然だ。そもそも、満潮にとつてみれば、こんな風に平和な時間を過ごすことが苦痛ですらあつた。

「ホンツト」の部隊はぬるいわね……仲良しごっこしてんじやないんだから……」

こここの提督が言うには、「地獄を生き延びてきた君への休息期間だ」らしいが。満潮にとつては、そんなものは必要無かつた。むしろ、何もせずこうしているほうが余計に疲れを感じて嫌になるほどだ。

「そもそも、『地獄』ですか？　はつ、笑わせてくれるわ」

確かに前の鎮守府はろくでもない環境だつた。毎日のように大破撤退を繰り返し、轟沈した戦友は数えきれず、いつ明日の朝日が見られなくなるかもわからない。しかしそれでも、あそこは決して『地獄』と呼べるような場所ではなかつた。

「たかだか毎日死にかける程度が『地獄』？　あの鎮守府での日々があの忌々しいスリガオの海と同列ですか？　——寝言は死んでから言いなさいよね」

吐き捨てるように呴いた満潮の言葉は、誰の耳に届くこともなく虚空へと消えていく。忌々しいが、待機命令が撤回されない以上、こうして飼い殺しにされている他ない。

「はあ……どうしよう。朝潮型との交流でも……いや、無いわね。『アレ』と仲良くするのは無い」

同じ朝潮型の面々の顔を思い浮かべて即座に否定する。自分と同じく生き残り、別々の鎮守府に引き取られていつたであろう、前の鎮守府の朝潮型の皆とならいいくらでも会話したかつたが、あの連中とは話してもろくなことにならないだろうという確信があつた。
(ていうか、あいつら本当に私の姉妹なの？)

正直な話、あれが『朝潮型』だと言われても困惑しかなかつた。満潮が知る『朝潮型』の姉妹たちとはあまりにも違つていたから。
『嫌なら戦わなくてもいいのよ』『ゆっくり心を休めてください』

「うえ……」

この鎮守府の姉妹たちにかけられた言葉の数々を思い返して満潮は思わず口元を押さえた。補給の為でもないのに食べる羽目になつた米や魚が胃から込み上げてくるような感覚すら覚えた。

「冗談じやないわ……あんな奴らが姉妹とかありえないわよ……」

そうだ、あんなものが『朝潮型』であるはずがない。よりによつて自分に、この『満潮』にあんな言葉をかける奴らが自分の姉妹であるはずがないのだ。

むしろ「また死に損なつたわね。私たちも運がいい、いや悪いのかしら」と肩を竦めて、誰かが「次は誰が沈むと思う？」そろそろ満潮だと思うんだけど」と笑えないジョークを飛ばして来て、満潮はそれに「それは外れね、そうなつたら私があなたを先に沈めるもの」と悪態で返しながら、次なる戦場に赴くのだ。

満潮の姉妹はそんな連中だつた。少なくとも、満潮の知る皆はそうだつた。だからこそ、この鎮守府の連中のことは理解できなかつたし、受け入れたくもなかつた。

「そうよ……私の姉妹はあんな気持ち悪い連中じゃないもの……」

吐き捨てるように呟いて、ふと気付く。気持ち悪いと思つてゐるのは、自分だけなのか、と。

「……ああ、そつか。そういうこと」

思い至つて、思わず自嘲するように笑みを浮かべる。そうだ、あいつらも……この鎮守府の『朝潮型』もきっとそう思つてゐるに違ひない。

「ずっと不思議だつたのよね」

満潮はずつとわからないことがあつた。この鎮守府の連中は、満潮が未だに出撃を嘆願する度に、こう答えるのだ。

『もういいんです。もうあの提督はいないんです』

満潮にはその意味がわからなかつた。なぜ自分が出撃を望む度に、死んだ前任の話が出てくるのか。なぜ誰も彼もが、悲しげな顔をして前任の死を語るのか。なぜ自分が戦うことを見られていないのか。その答えは、ひどく単純なものだつた。

「簡単じやない。あいつらも私のことが気持ち悪いのよ」

そう考えると、すべてのこととに説明がつく気がした。そう、この鎮守府の連中は皆、満潮のことが気持ち悪いのだ。戦いしか知らず、平穏を望んでいない、そんな満潮のことを気味悪く思っているのだ。

「だから司令官のせいだと思おうとするんだわ。私を気持ち悪いと思つてることを認めたくなくて」

満潮が戦うことを見るのは、前任のせいだ。満潮が平穏を拒むのは、前の提督のせいだ。そうやって、満潮の『異常』の全てを前任のせいにすることで、この鎮守府の連中は自分を納得させようとしているのだ。

「バッカみたい。あの人と何にも変わんないじゃない」

結局のところ、前任と同じなのだ。彼が艦娘を兵器としか見ていかつたように、ここに連中は満潮を『被害者』というファイルターでしか見ていない。被害者だから、休息が必要だろう。被害者だから、戦うのは嫌だろう。そんな勝手な理屈を振りかざして、満潮に休息という名の鎖を巻きつけている。

「笑えるわね。結局、自分たちの考えが最優先で私のことを見てないのはあの人と同じなんだから」

そうだ、考えてみれば、この鎮守府にいる全員が、前任と同じように、満潮のことを見ようとしている。『被害者』の個性など気にもしない。満潮が本心から出撃を望んでいるのに、それが戦いしか知らないかったせいだと決め付けて、もう戦わなくていいと慰めるのだ。それが侮蔑なのだとは夢にも思わずには。

「あいつらが私を理解しようとしないなら、私があいつらを理解しなくてもいいわよね？」

満潮はもうここに連中にはなにも期待しない。自分のことを理解しようともせず、ただ『可哀想』だという同情を押し付けるだけの連中に、これ以上付き合つてやる義理はないのだ。どうせ、あいつらは『どうして満潮の心を救えないのだろう』と悲劇のヒーローぶつて嘆くだけだ。満潮の心を知る努力もしていらない癖に。

ならば、満潮だって、あいつらのことなど知ろうとしなくともいい

はづだ。

「あ～あ。司令官が生きてればねえ」

『被害者』だから戦わなくていいという連中と、『兵器』なのだから黙つて戦えという前任。何も違はない。それなら、満潮は前任の頃の方が良かつた。少なくとも、彼は自分を『兵器』として扱ってくれた。望むとも望まずとも、戦いの日々に放り込まれ、余計な考えなど抱く余地もないあの頃が懐かしかつた。

そう考へると、彼は満潮にとつて、良き司令官だつたと言えるのかもしれない。

「私がそう思わないと、あの人がかわいそうだもの」

言つて、苦笑した。あの人人が聞いたら激怒するだろう。兵器のくせに、人間様を哀れむなど何様だと。前任の口癖を思い出す。
『どうしてお前らは心なんかあるんだ？　兵器にそんなものは不要だろう』

「ええ、司令官。あんたの言つた通りだわ」

まつたくだ。この身が『兵器』であればどんなによかつたか。物言わぬ戦艦のままだつたなら、こんなにも惨めな思いはしないのに。
「なんで、私には心があるのかしら？　どうして人の身体を得たのかしら？」

人間の身体などがあるから、使われなくなつてしまふなら、前世の方がよほどマシだつた。そもそもこういう思考が浮かんでくる事すらも、心があるからだというのだから傑作だ。

「私、なんでこんな部隊に配属されたのかしら」

——自嘲でしかなかつたはずのその言葉が、本心からのものになるのは初めてだつた。